

存在論的コミットメントの概念とメタ理論的考察

高取 正大 (Takatori Masahiro)

慶應義塾大学大学院文学研究科・日本学術振興会

こんにちの分析形而上学の中で、存在論的コミットメントの概念は、よく普及した哲学的道具立てとなっている。この概念は、文や理論について、〈それが真であるために存在する必要があるもの〉を特徴づける（そしてそのことによって、分析形而上学の主要な問いである、「何が存在するのか」への答えに貢献することを目指す）。従って、この存在論的コミットメント概念に対しては、次のように理解されることが一般的である。すなわち、文および理論がどんな存在論的コミットメントをもつかは、それらの真理条件の探究を通じて明らかにされる、というものである (e.g. Rayo (2007), Moretti & Price (2008), Bricker (2014))。言い換えれば、文や理論の存在論的コミットメントは、それらに対してメタレベルから意味論的考察を行うことによって特徴づけられる、という見方が、広く受け入れられている。

存在論的コミットメント概念について、上述のような標準的理解を採用するとき、あまり明示的な言及なしに前提される、以下のような事柄がある。メタレベルでの意味論的考察によって（対象レベルの）理論（および文）の存在論的コミットメントを特徴づけるということは、メタ理論（意味論）において存在が認められる対象を用いて、対象理論の存在論的コミットメントを特徴づける、ということを読み取る。しかし、ここで次の点に注意する必要がある。つまり、ふつう、メタ理論において存在が認められるいかなる存在者についても、もとの理論（対象理論）の存在論的コミットメントに含まれる、と主張されるわけではない。例えば、存在論的コミットメントに関する一般的原则を述べたものとして有名な、「存在論的コミットメントのクワイン的基準」に即して考えると、次のようになる。この基準によれば、（メタレベルの）意味論において認められる存在者のうち、対象理論の“量化の変域”の要素になるものとして割り当てられる存在者のみが、もとの対象理論の存在論的コミットメントとなる。標準的な意味論において用いられる存在者は、量化の変域の要素になるもの以外にも（当然）数多くある。（例えば、標準的な意味論は、一項述語の意味論的値として、量化の変域の部分集合という存在者を割り当てるだろう。）しかし、それらは、クワイン的基準を採用する限り、もとの理論の存在論的コミットメントには含まれないとされる。以上の議論から、存在論的コミットメントの標準的理解（メタレベルからの意味論的理解）においては、次のことが前提されているのを指摘できる。すなわち、メタ理論（意味論）において存在が認められる存在者を、もとの対象理論の存在論的コミ

ットメントに含まれることが想定されるものと、そうでないものに区別できる、ということである。後者の種類の存在者は一般に、メタ理論において単なる意味論的道具だとして用いられているだけだ、とされる。(非クワイン的な存在論的コミットメントの基準を採用した場合でも、同様の区別がどこかで行われることとなる。そのような基準のもとでは、対象理論の存在論的コミットメントとして認められる存在者が、量化の変域の要素になるものと等しくならないだろう。しかしそれでも、これまで提案されたいかなる非クワイン的な基準も、メタ理論が用いる存在者について、上述の区別じたいは行っていると考えられる。) この前提は、それじたいで明示的にとりあげられることが少ないが、存在論的コミットメント概念の意味論的な特徴づけにおいて重要な役割を果たすものである。(例えば Krämer (2014) においては、二つの種類の存在者を区別するため、「対象言語の主題 (subject matter) となるもの」、および「意味論における補助的な装置 (auxiliary machinery)」という用語法を導入している。同じ区別は Rayo (2007) においても解説されている。)

以上で述べた、メタ理論 (意味論) において用いられる存在者の区別に関する前提は、これまで主題的に論じられる機会が少なく、なかば当然視されてきたと言える。(この区別を前提することは、存在論的コミットメント概念について論じる際の、いわば“良識的”な考慮として扱われていると思われる (cf. Rayo (2007)).) 本発表の目的は、この種の区別が実際のところどれほど正当化できるものなのかについて、批判的に検討することである。より具体的には、以下のような論点を扱うことを目標とする。(i) メタ理論 (意味論) において認められる存在者を、対象理論の存在論的コミットメントに含まれるものと単なる意味論的道具だとして区別する試みには、(少なくとも) それほど強力な正当化は与えられない。これらを区別するための基準として提案可能なものには、(上述したクワイン的なものにせよそれ以外にせよ) いずれも、何らかの恣意性または論点先取が生じざるをえないことを示す。(この過程で、Krämer (2014) において区別の基準として提出されているものを批判する。) (ii) (i) で述べた困難を回避した上で、存在論的コミットメント概念の意味論的 (もしくはそれに準じる) 特徴づけを維持したい場合、存在論的コミットメントの基準としてどのようなものが提案できるかを検討する。またこの論点とあわせて、意味論的概念を明示的に経由しないような、存在論的コミットメント概念の特徴づけについても触れたい。

参考文献

- Bricker, P. (2014), “Ontological Commitment”, in Zalta, E. N. (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2014 Edition),
URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/win2014/entries/ontological-commitment/>>.
Krämer, S. (2014), *On What There Is For Things To Be: Ontological Commitment and Second-Order Quantification*. Vittorio Klostermann.

Moretti, L. & Price, H. (2008), “Introduction”, *Philosophical Studies* 141: 1—5.

Rayo, A. (2007), “Ontological Commitment”, *Philosophy Compass* 2: 428—444.